別紙1

事例別カリキュラム

（カリキュラムの視点毎の項目）

視点	ストーリー	項目	0歳の頃	1歳の頃（前半）	1歳の頃（後半）	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
Ⅰ 自立した生活を楽しむ子	ものの出し入れから片付け遊びへ	ものの出し入れ	8～12	○	○				
		片付け遊び			○	○			
	形式的な片付け行動から意図的な片付け行動へ	一緒に片付けをする					○		
		見通しをもち片付ける						○	○
	自分なりに持ち物の始末をすることから習慣化へ	持ち物の始末をする					○		
		習慣として持ち物の始末をする						○	○
Ⅱ 人とかかわることを楽しむ子	いないいないばあから追いかけ遊びへ	いないいないばあ遊び	6～10･10～12						
		かくれ遊び		○					
		まてまて遊び		○					
		追いかけ遊び			○	○			
	あやしうたからふれあい遊びへ	あやしうた	6～10						
		ふれあい遊び	10～12	○	○	○	○		
	鬼ごっこからルールのある集団遊びへ	しっぽとり				○	○	○	
		鬼ごっこ						○	○
		どろけい							○
		氷鬼							○
Ⅲ ものとかかわることを楽しむ子	砂・土・水いじりからそれらを使って表現する遊びへ	身近なものいじり	4～6･6～10 ･10～12						
		水いじり	10～12	○					
		砂・土いじり			○				
		砂・土・水の遊び				○			
	泥遊びから泥団子・色水づくりへ	泥遊び					○		
		泥団子づくり						○	○
		色水づくり						○	○
	砂・土・水の不思議探究から協同的な砂場遊びへ	砂・土・水の不思議探究						○	○
		協同的な砂場遊び（砂場での山を作る遊び）						○	○
		協同的な砂場遊び（砂場での水を流す遊び）						○	○
Ⅳ 探究することを楽しむ子	身近なものに対する探索行動から共感的なまねっこ遊びへ	探索行動	8～12	○	○				
		まねっこ		○	○				
	ままごと遊びからお店屋さんごっこへ	ままごと遊び				○	○		
		お店屋さんごっこ					○	○	○
	ごっこ遊びからストーリー性のある劇遊びへ	単独のごっこ遊び					○		
		協同でのごっこ遊び						○	○
		協同での劇遊び・劇づくり						○	○

Ⅰ　自立した生活を楽しむ子

ものの出し入れから片付け遊びへ

事例1【ものの出し入れ】0歳の頃（8～12か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
棚に入っているものを引っぱり出したり、箱をひっくり返して中のものを出したりと「出す」動きをよくするようになります。また、ぽっとん落としなどで「入れる」動きもして楽しむようになります。
（それは）
・意識的に手に持っているものを放せるようになり、投げたり開けたりするようになるなど、「出す」動きができるようになるからです。また、手に持っているものを近くに置いてある入れ物に「入れる」動きもできるようになるからです。

ここでは

シフォン布を筒の中から引っ張り出して遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・「出す」遊びが盛んに見られるため、子どもの手の届く範囲に、危険なものは置かないようにします。
・「出す」遊びを十分に楽しんで経験できるような玩具を準備します。
・入れる遊びでは、子どもの手の動きに合わせた形や素材、入れ物を準備します。

事例2【ものの出し入れ】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
自由に「出す」「入れる」ということを楽しみながら、「これぽっとんして」「ちょうだい」など、保育者の言葉に応じて出したり入れたりして遊ぶようになります。入れるときには穴などに入れるものの、向きなどを合わせ「ここ」と入れるようになります。
（それは）
・保育者の簡単な言葉がけを理解するとともに、形の認識ができるようになるからです。

ここでは

ぽっとん落としを手先を使って穴の中に入れることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・自分なりに自由に出し入れの遊びを楽しむことを大切にし、手指をたくさん使って遊べるようにします。
・特に穴には何でも入れたがるようになり、指を入れて抜けなくなることもあるので注意します。
・保育者からの分かりやすい言葉がけに対して、出したり入れたりする機会をもつことで片付けるということにつながっていくようにします。

事例3【ものの出し入れ】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
2つの器にものを入れ分けることができ、一方から他方への移し替えを繰り返して遊ぶ姿が見られるようになります。また、大中小の入れ子状の玩具を試行錯誤しつつ重ねて入れたり、〇△□などの基本的な型はめを楽しむようになります。
（それは）
・大小の大きさや〇△□の形の違いがわかるようになり「●●ではない〇〇だ」という認識をもち、比べながら遊ぶことを楽しむようになるからです。

ここでは

1つずつ型の形をよく見ながら確認し、型はめで遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・大中小など大きさの異なる玩具を準備して、出し入れを楽しめるようにします。
・出し入れが難しい時は、さりげなく援助しながら「できた」喜びを共感していくようにします。

事例4【片付け遊び】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者の言葉がけにより、気持ちが向くと自分のマークの目印のある自分の場所へものを片付けようとするようになります。他の子が入れる様子を見て「自分も」と入れる様子が見られるようになり、顔を見合わせ笑う様子も見られます。また、保育者の歌などに合わせて玩具を元の位置に片付けようとするようになります。
（それは）
・自分のマークを覚える力が身に付き、信頼関係のある保育者の言葉がけを受けてやってみようとするからです。

ここでは

自分の使用したタオルをカバンに片付ける姿が見られました。

保育のポイント

・ただ片付けるだけでなくやりたいと感じることができるように、歌を歌ったりしてその都度片付けることができた嬉しさを受け止めていきます。
・やりたい気持ちがぶつかってしまわないように他の子と一緒に遊ぶ楽しさを受け止めて仲介していくようにします。
・子どもの関心が向くように言葉がけをしながら、自分でする姿を大いに認めて意欲をもてるようにします。

事例5【片付け遊び】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
棚に貼ってある玩具の写真を見て同じものを戻そうとするようになり、色別に分けることを楽しむようになります。また、保育者の援助を受けながら片付けをしようとするようになります。
（それは）
・色、形、目的などに沿って分別できるようになるからです。

ここでは

チェーンリングを色別に箱に分けて片付ける姿が見られました。

保育のポイント

・色合わせを楽しみながら、1人で集中して、または友達と相談しながら「きれいになったね」「色分けできたね」など、心地よさを味わえる言葉がけをします。
・遊びの延長で玩具を元の場所に楽しみながら戻せるよう、片付ける場所が視覚的に分かるよう環境を工夫します。
・片付いたことを一緒に喜び、認めたりすることで自信へつなげられるようにします。

形式的な片付け行動から意図的な片付け行動へ

事例1【一緒に片付けをする】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
「次○○だから片付けよう」と、片付けの時間になると自分の使った玩具や友達が使った玩具を片付けるようになります。
（それは）
・毎日の生活習慣で次の活動の見通しが少しつくようになり、分かりやすい目印を見ながら片付けを行い、次の活動に気持ちを向けることができるようになるからです。

ここでは

保育者や友達と一緒にブロックを片付けていく姿が見られました。

保育のポイント

・玩具の片付ける場所にはその玩具の写真を貼って、分かりやすくします。
・新しい玩具を使う時には、使っていた玩具を片付けてから遊ぶように促すことで、玩具を片付ける習慣を少しずつ身に付けられるようにします。
・ままごとやブロックなど、片付ける玩具が多い場合は、保育者も一緒に行うようにします。

事例2【見通しをもち片付ける】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者の言葉がけに促されながら、自分の使ったものだけでなく、みんなで使ったものも一緒に所定の場所に片付けようとするようになります。
（それは）
・時間の見通しがもてるようになり始めるとともに、いろいろな場所にある遊具や教材に目が向けられるようになり、どこに何を片付けるのか、何をすべきなのかがわかるようになることで、保育者の誘いかけで自ら動くことができるようになるからです。

ここでは

保育者が見守る中で、みんなで使った積み木をそれぞれが元のように片付けようと運ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・どこに何を片付けたらいいのかわかりやすく表示するとともに、保育者が一緒に片付けながら片付け方や、片付ける場所を丁寧に繰り返し伝えるようにします。
・子ども達が意欲をもって取り組めるように保育者も子ども達と一緒に片付けるようにします。
・意欲をもって取り組む姿を十分に認めることで、自信につなげるとともに、他の子への意欲へとつなげていくようにします。
・時間の目安を伝えることで、少しずつ見通しをもって取り組むことができるようにします。

事例3【見通しをもち片付ける】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者の援助がなくても、時間に見通しをもって友達と協力しながら片付けをするようになります。
（それは）
・時間の見通しがより一層もてるようになるとともに、保育者の力を借りず自分達だけで片付けをやり遂げることができたことに喜びを感じ、自信をもち行動するようになるからです。

ここでは

時計を見て片付けの時間になったことに気が付くと、「先生をビックリさせよう！」と子ども達だけで片付けを始めました。そして、片付ける中で、友達と協力すれば一度にたくさんの積木を運べることにも気付き、お互いに声をかけ合いながら力を合わせていく姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達だけで進めることができるようになったことに自信を持ち、保育者に頼らずにやり遂げたいという気持ちが芽生えてくるので、子ども達に任せる部分もつくり、認めることでより自信をつけられるようにします。
・片付けの時間だけでなく、自分の活動に応じてその都度、整理して遊びやすい環境の中でみんなが遊べるようにします。

自分なりに持ち物の始末をすることから習慣化へ

事例1【持ち物の始末をする】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者に聞きながら、自分でおたより帳にシールを貼ったり、タオルをかけたりするようになります。
（それは）
・やり方が分かることで自分でしようという意欲をもつようになるからです。

ここでは

登園時にそれぞれの子どもが、日付の表示を見て確認しながら、自分のおたより帳にシールを貼る姿が見られました。

保育のポイント

・まずはやり方が分かるように、言葉だけでなく、絵でやり方を描いた表を見える位置に貼って、手順を知らせるようにします。
・忘れていることもあるので、その時には個別で言葉がけをしたり、そばで見守ったりします。

事例2【持ち物の始末をする】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
毎日の繰り返しの中で、手順が分かり、自ら進めることができるようになります。また、友達の存在や周りの様子に気付き、手伝おうとしたり教えようとしたりするようになります。
（それは）
・保育所や幼稚園での生活に慣れ、持ち物の始末や靴の履き替え、給食の準備などの仕方がわかり必要性が次第に身に付き、習慣化され自分で進めていけるようになるからです。

ここでは

それぞれにおたより帳にシールを貼り、おたより袋を所定の場所に出し、朝の身支度を進めていく姿が見られました。

保育のポイント

・視覚的支援や、一人一人に保育者が関わりをもち、どのようにするといいのかを伝えることで、自分で進めることができるようにします。
・自分で進めることができるようになってきたら、保育者は様子を見守るようにします。そして、できたことを認め、自分でできたことに達成感をもてるようにします。

事例3【習慣として持ち物の始末をする】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
毎日の繰り返しの中で、すべきことがわかり、一連の動作として自ら進めていくようになります。
（それは）
・時間の流れを予測して生活できるようになるとともに、保育所や幼稚園生活で必要なことが習慣化され、自主的に行動できるようになるからです。

ここでは

保育者がその場に居なくても、登園した子から順次必要な支度を済ませ、それぞれの遊びがスタートしていく姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達が自分で行動しているときは温かいまなざしで見守るようにします。
・生活の流れとして自分で進めることが習慣化され、自信もつき戸惑っている子に積極的に教えようとする気持ちが芽生えてくるようになるので、その姿を十分に認めていくようにします。
・身支度だけでなく、自分のロッカーの荷物の状態に応じて整理もできるように知らせていきます。

Ⅱ人とかかわることを楽しむ子

いないいないばあから追いかけ遊びへ

事例1【いないいないばあ遊び】0歳の頃（6～10か月の頃）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者が顔に薄い布をかけ「いないいないばあ」と布を取り、保育者の顔が見えることを楽しむようになります。
（それは）
・信頼できる保育者の顔が認識できるようになり、やり取りを楽しむようになるからです。

ここでは

保育者が「いないいないばあ」という掛け声に合わせて、顔にかぶったシフォン布を引っ張ってやることで、保育者の顔が見えることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・人見知りが始まり、知っている人の顔が見えると喜ぶという姿が出て来るようになる時期です。いないいないばあ遊びを通して、隠れていた大人の顔が見えることで楽しさや安心感を感じられる様にし、その中で子どもの特定の大人との愛着も深めていけるようにします。

事例2【いないいないばあ遊び】0歳の頃（10～12か月の頃）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
見えなくなった保育者が出てくるのを期待したり、目の前で見えなくなったものを探そうとする姿が見られるようになり、繰り返し経験してきた「いないいないばあ」の掛け声で子どもが自分でアクションを起こし保育者を見つけて楽しむようになります。また、自分がしたことに対して保育者から反応が返ってくることを喜び、やりとりを繰り返すようになります。
（それは）
・信頼できる特定の人との関わりを強く求めるようになるとともに、見えなくなったものが現れることに楽しさを感じるようになるからです。

ここでは

シフォン布を使い保育者の「いないいないばあ」の掛け声に合わせて、子どもが自分で布をとって保育者とのやり取りを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・期待をもって喜ぶ姿が見られるようになってきているため、子どもの様子に合わせて間をとったりしながら子どもの「見たい」「やりたい」などの気持ちを引き出していくようにします。
・子どもがしたことに丁寧に反応を返していくことで保育者との関わりの中で面白さを感じられるようにします。
・手で顔を隠すだけではなく、シフォン布やサテン布など、様々なものを用いて楽しめるようにします。

事例3【かくれ遊び】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
独歩ができるようになり、様々な姿勢もとれるようになり、自分で隠れ、見つけてもらうことを喜ぶようになります。また、保育者だけでなく他の子とも関わるようになり、「隠れる・現れる」という同じ動きをして喜んだり、「探す・見つかる」ということを楽しんだりするようになります。
（それは）
・「いないいないばあ」のようなやりとりを相手にしてもらって楽しむだけでなく、自ら相手にして見せて楽しむことができるようになるからです。
・隠れられる場所を見つけ、自分で移動したり、隠れてまた出る体の動かし方が分かり、保育者や他の子と関わることに楽しさを感じるようになるからです。

ここでは

家に入り隠れながら友達に見つけられたことを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・保育者が間に入ったり、他の子のしていることに興味をもつ姿を自然と引き出すことができるように、楽しい雰囲気を作りながら関わりを広げていきます。
・自ら体を動かす楽しさや、保育者と関わる心地よさを十分に味わうことができるように、関わっていくようにします。

事例4【まてまて遊び】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者が「まてまて」と声を掛けると、喜んでハイハイをして逃げたり、よちよちと歩いて逃げたりするようになります。
（それは）
・保育者に親しみをもち、大好きな保育者と一緒にハイハイしたり、よちよちと歩いて逃げたりすることに楽しさを感じるようになるからです。また、捕まえられて抱きしめられることに喜びを感じるようになるからです。

ここでは

「まてまて」と追いかけてくる保育者からハイハイしたり、よちよちと歩いたりしながら逃げることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・体と心の相互が育つように、子どもの様子や気持ちに合わせて追いかけるスピードを調節したり、捕まえたりして、まてまて遊びを楽しめるようにします。その中で保育者や他の子と触れ合う心地よさや嬉しさを味わえるようにします。
・自ら体を動かそうとする意欲が持てるようにします。
・保育者に対する甘えたい欲求が十分に満たされるようにします。

事例5【追いかけ遊び】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
追いかけ逃げる遊びを楽しむようになり、保育者に捕まえられぎゅっと抱きしめられると喜ぶようになります。
（それは）
・歩行が確立されてしっかりした足取りになり、それまでのようにハイハイをしたりよちよちと歩いて逃げるだけでなく、小走りで逃げることができるようになるからです。
・保育者の言葉がけが分かり、言葉に応じて行動し、その楽しさを見いだすようになるからです。

ここでは

保育者のことを意識しながら追いかけられることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・しっかりとした足取りになり、走ることができるようになることで、行きたいところに行けるようになるため、子どもが安全に走ることのできる空間を確保し、怪我のないように見守るようにします。

事例6【追いかけ遊び】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
今までは、「まてまて」と保育者に追いかけられ逃げることを楽しんでいましたが、今度は子どもが逃げる保育者を「先生、まてまて」と追いかけ、追いつくと喜び、「もう一回」と繰り返し追いかけることを楽しむようになります。
（それは）
・今までの経験から追いかけ遊びの楽しさがわかるようになり、逃げるだけでなく追いかけることを楽しむようになるからです。
・追いかけ逃げるやりとりを、やがては保育者だけでなく子ども同士でも行うなど、少しずつ役割を交替し合う遊びの楽しさがわかるようになるからです。

ここでは

逃げる保育者を「まてまて」と友達と一緒に追いかけることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・少しずつ友達を追いかけたいと思っている子もいれば、保育者を追いかけることを楽しんでいる子もいます。それぞれの思いに応じて十分に追いかけることや追いかけられ逃げること、そして役割を交替することを楽しめるようにします。

あやしうたからふれあい遊びへ

事例1【あやしうた】0歳の頃（6～10か月の頃）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
特定の人には笑顔を見せたり、機嫌のよい声を出したりするようになります。そうした中で特定の人にあやされることで安心感をもって相手との関わりを楽しみ喜ぶようになります。
（それは）
・特定の人との愛着関係が築かれ、人が見分けられるようになり人見知りが始まってくるからです。

ここでは

信頼できる保育者のあやしうたを聴きながら、心地よさそうに安心した表情で保育者の顔を見つめる姿が見られました。

保育のポイント

・信頼できる大人と1対1であやしうたを通して関わり、心地よさを感じられるようにすることで子どもとの愛着関係を築いていけるようにします。

事例2【ふれあい遊び】0歳の頃（10～12か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
わらべうたを保育者が歌ったり、歌に合わせて動いたりしている姿に気付き、そのことを繰り返すことで、期待感をもって楽しむ姿が見られるようになります。
（それは）
・保育者との関わりの中で身振りを模倣したり言葉がけに体で表現できるようになるからです。

ここでは

保育者と目と目を合わせながら、膝の上で「うまはとしとし」というわらべうたに合わせて体を動かすことを楽しむ様子が見られました。

保育のポイント

・保育者の姿やわらべうたを歌う声に気付いて興味をもつ姿が見られるようになるので、近くにいる子だけでなく周りの子達にも一緒に歌や体を動かすことを楽しめるよう関わります。

事例3【ふれあい遊び】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者と一緒に歌を口ずさんだり体を動かしたりしてふれあい遊びを楽しむようになります。また、見ている周りの子ども達も「やって」と求めるようになります。
（それは）
・肌と肌とが触れ合う心地よさだけでなく、保育者と一緒に同じことをして関わる心地よさを感じるようになるからです。

ここでは

「このこどこのこ」というわらべうたに合わせて、保育者の膝の上に座って一緒に横に揺れる動きを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・1対1の触れ合い、関わりを大切にしながらやってほしい気持ちを受け止め、満足いくまで繰り返し遊べるようにします。

事例4【ふれあい遊び】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者がわらべうたを歌い始めると、歌に合わせて覚えた動きを保育者と一緒に楽しむようになります。
（それは）
・肌と肌とが触れ合う心地よさだけでなく、保育者の動きをよく見て、簡単な動きを真似ることができるようになるからです。

ここでは

「じーじーばー」というわらべうたに合わせて、自分の顔をシフォン布で隠したり出したりすることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・大人の真似をよくするようになるので、1つ2つの簡単な動きを繰り返すものなど、子ども達が見て分かりやすく真似しやすいわらべうたを取り入れていくようにします。

事例5【ふれあい遊び】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者や友達とじっくりと触れ合うことを喜び、繰り返し遊ぶことを楽しむようになります。また、少しずつ簡単なふれあい遊びを友達同士でしようとするようになります。
（それは）
・保育者との信頼関係の基、一緒にやってもらう喜びや安心感、わらべうたの歩調の心地よさを知り、友達と一緒にふれあい遊びをすることの楽しさも感じられるようになるからです。

ここでは

友達と一緒に「お船はぎっちらこ」のわらべうたを歌いながら、触れ合って遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・まずは保育者と十分にふれあい遊びを楽しむようにします。
・繰り返し遊ぶうちに友達とも遊ぼうとするようになるので、保育者が仲立ちしながら、友達と触れ合う楽しさも感じられるようにします。

事例6【ふれあい遊び】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
一緒に列になって歩く（前の人について歩く）、鬼役になって円の中で止まる、鬼役を交代するわらべうた遊びを楽しむようになります。また、乳児の時に保育者にやってもらった顔遊び、ひざのせ遊びを人形を使って行うようになります。
（それは）
・乳児期に保育者にたっぷりとしてもらった経験が、誰かと楽しみたい、誰かにやってあげたいという思いにつながっているからです。

ここでは

・膝に人形をのせ、人形を動かしながらわらべうた遊びをする姿が見られました。

保育のポイント

・小人数グループで始めたり、保育者が歌うことが大切です。
・誰かをやっつける鬼役ではなく役交代の意味が大きく、子どもはやりたがるので、順番に全員がその役に当たるようにします。
・子どもの情緒の安定、保育者・友達に親しみを感じたり、受け入れたりすることを大切にし、日常の中で自然と取り入れるようにします。

鬼ごっこからルールのある集団遊びへ

事例1【しっぽとり】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
単純に相手のしっぽを取ることに共通の目的をもって楽しむようになります。
（それは）
・視覚的に分かりやすい玩具（しっぽなど）を取り入れることで、イメージが沸きやすく、共通の目的をもって遊べるようになるからです。

ここでは

保育者の背中についているしっぽを子ども達が取ろうと追いかけて遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・遊ぶ中で友達の様子を知らせたり、しっぽの存在に気付けるような言葉がけをして、視覚的に少しずつ遊びの幅をひろげ、簡単なルールにつなげていくようにします。
・保育者とだけでなく、友達との触れ合いを楽しめるように少人数から誘いかけるようにします。

事例2【しっぽとり】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
単純に相手のしっぽを取るだけでなく、自分のしっぽを取られまいと守ったり逃げたりするようになります。
（それは）
・しっぽを取ったら勝ち、しっぽを取られたら負けというルールが、漠然とではあるものの分かるようになるからです。
・しっぽを取ることや取られないようにすることにこだわりをもつようになるので、取られたら泣きだしたり、ふてくされたり、遊びをやめたりするようになります。しかし、役割を交替しながら繰り返し友達同士で楽しむ中で、少しずつ遊びの面白さに気付き、最後まで続けることができるようになります。

ここでは

保育者のしっぽを取ろうと追いかけるとともに、自分のしっぽを取られまいと必死に逃げる姿が見られました。

保育のポイント

・それぞれの気持ちを十分に認めつつ、保育者と一緒に追いかけられる役をやってみたり、取られたしっぽを取り返すことができるようにしたり、遊びを楽しむことができるようにします。
・少しずつ遊びが理解できるように最初は保育者も参加して遊び、慣れてきたら、子ども達にやりたい方を聞いて、追いかける方と逃げる方に分けて遊ぶようにします。

事例3【しっぽとり】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
1人1人が相手のしっぽを取る、自分のしっぽは取られないようにするという遊び方から、チームに分かれて取ったしっぽの数を競って遊ぶようになります。
（それは）
・個々にしっぽを取り合うことで満足していた子ども達が、友達をより意識して、友達と一緒にしっぽを取り合うことに楽しさを感じるようになるからです。
・友達と同じ場で遊んだり、保育者をきっかけに会話を重ねる中で、次第に友達意識をもつようになり、保育者ばかりでなく、友達の存在を一緒に居て安心できる楽しいと感じるようになるからです。
・帽子の色を変えるなどの工夫をすることで、どの子が同じチームの子か瞬時に理解して遊ぶことができるようになるからです。

ここでは

保育者も交えた2つのチームに分かれ、相手チームの子としっぽを取り合い、取ったしっぽはチームの陣地に集めていき、取られた子は新たなしっぽをつけてまた遊びだすというしっぽ取りを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・捕まるのが嫌でルール通りにはできない子も出てきますが、保育者がこだわりすぎると遊びが楽しくなくなり遊び自体が消滅してしまうので、子どもの様子を見ながら遊びを楽しむことを優先して関わりをもつようにします。
・子ども達が遊びの中で、友達の行動にこだわったり、「こうしたい」「こうされるのは嫌」というような思いをもつようになった時には、その思いに寄り添った関わりをもちます。保育者が、思いを聞き、一緒に遊んでいる友達へ伝え、共に考える機会を大事にすることで、楽しく遊ぶためには、ルールを作ったり守ったりすることも大切だということに気付いていけるようにします。

事例4【鬼ごっこ】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
同じ遊びを楽しんでいる友達や、一緒の場所にいる友達と声をかけ合いながら、「追いかける」「逃げる」「タッチする」の簡単なルールを理解して、なんとなく同じ目的をもって遊ぶようになります。しかし、タッチされたくないのにタッチされたり、タッチしたいのになかなかタッチできないと、すねたり遊びから抜けてしまうこともあります。
（それは）
・追いかけ、追いかけられたら逃げるという1対1の追いかけ遊びから、追いかけるのは1人であるが、視野が広がり、複数の子を見ながら友達を意識して遊ぶようになるからです。
・友達と一緒に遊ぶことに楽しさを感じられるようになったものの、自分の気持ちに折り合いをつけることに未熟さがあるからです。

ここでは

保育者に追いかけられる楽しさを感じながら、一緒に逃げている友達と「先生、こっちだよ～！」と保育者を呼びながら顔を見合わせて喜んでいる姿が見られました。

保育のポイント

・集団を意識して遊ぶようになったものの、鬼役の子が複数の子を狙って追いかけることは難しく、その時々でこの子と決めた1人を追いかけます。しかし、逃げる方はどの子も自分を追いかけてほしいという思いをもっており、そのような思いを配慮した保育者の関わりが必要です。
・怪獣やミツバチなど、子ども達から出てきたイメージを取り入れ、ごっこ遊びの要素を含めることで、より楽しく遊ぶことができるようにします。そして、その安心感の中で、友達同士で声をかけ合い、気の合う仲間関係を築いていけるようにします。
・遊ぶ範囲を決めることで、より友達の動きを意識して見ることができ、いろいろな友達と関わり合いながら遊びを進めることができます。

事例5【鬼ごっこ】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
鬼役の子は逃げる子をより意識して追いかけるようになり、逃げる子は鬼役の子に捕まらないように、周りの子達の様子をより意識して距離をとりながら逃げて遊ぶようになります。
（それは）
・鬼役の子も逃げる子もより視野を広げて複数の子の動きを見られるようになり、その動きに連動した動きをすることができるようになるからです。
・追いかける、逃げるといった対立関係を楽しむようになり、鬼役の子は逃げる子を一早くみんな捕まえる。逃げる子は最後まで捕まらずに逃げきるという目標をもち、チームの仲間との協力関係を楽しむようになるからです。

ここでは

逃げる子が他の鬼役の子に気を取られているすきを狙って、もう1人の鬼役の子が素早く現れ追いかけてきました。逃げる子は慌てて逃げ出します。様々なところに注意を払っていなければならないスリルや、次にどう動こうかと作戦を立てていく面白さを感じながら、遊びが盛り上がっていく姿が見られました。

保育のポイント

・保育者が子どもと対等に、本気になって遊ぶ姿を見せることで、対抗心を引き出し、より遊びを活性化させるようにします。一方、運動の経験や体力には個人差があるため、保育者は、一人一人の姿を理解しながら遊びの一員となって楽しんでいくようにします。
・保育者がそれぞれの子どもの育ちに寄り添い、追いかけられるスリル感や思いきり走り、かけひきをしながらタッチする面白さを子ども達が十分に味わい、友達との遊びにより楽しさを感じられるようにします。

事例6【どろけい】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
泥棒役の子と警察役の子で駆け引きを楽しんだり、同じ役の友達と作戦を考え協力して遊ぶようになります。
（それは）
・警察役の子が別の子を狙うふりをして、近くの子を捕まえるなど、相手の裏をかくような工夫をすることで、より遊びを楽しくしようとするようになるからです。
・また、追いかける・逃げるといった鬼ごっこの基本的な楽しみ方を維持しながら、警察役の子のすきを見て捕まった子を助けるなど、友達との関係を意識した遊びを展開していくようになるからです。

ここでは

牢屋に入った泥棒役の子を仲間が助けにきたので、見守りをしている警察役の子がとっさに走り、守ろうとしている姿が見られました。

保育のポイント

・友達との駆け引きに夢中になり、遊びに没頭するあまり、周りの遊具や他の遊びをしている子に接触してしまうこともあるので、できるだけ身動きがとりやすい広い場で遊ぶことができるようにします。
・遊びながら、必要なルールを加えていくようになりますが、広い範囲の中で多くの人数で遊んでいて一部の子にしか伝わっていない場合も出てきます。そのような時には、みんなに伝わっているか保育者が投げかけ、子どもに気付かせて子ども達自らの行動につなげられるようにします。

事例7【氷鬼】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
子ども同士で一緒に遊びを楽しむ仲間を集め、鬼役の子の人数やルールを決めて遊ぶようになります。また、遊ぶ中で、トラブルが起きても子ども達同士のやり取りの中で話し合い解決していくようになります。

（それは）
・勝敗を意識するものの、すぐに勝敗のつく遊び方ではなく、じっくりと遊びを楽しみたいという思いをもつようになることで、人数の割合やルールにこだわるようになるからです。
・また、それぞれがみんなで一緒に遊んでいる仲間という意識をもち、自分の思いや考えを言葉で伝えようとするようになるとともに、友達の話を聞いてみんなで話し合い、解決策を考えようとするようになるからです。

ここでは

「みんな集まって～！」という声に、鬼役のチームのメンバーが集まり、「絶対に負けないぞ、エイエイオー！」とこぶしを振り上げ、みんなで気合をいれ、勢いよく走りだす姿が見られました。

保育のポイント

・鬼役の子にタッチされ凍った子が仲間に助けてもらうためには、自分から意思表示が必要になり、他の子は凍った仲間に気付き助ける方法を考えていく必要がありますが、自ら意思表示ができたり気付くことができる子ばかりではありません。保育者は、子ども達の様子を把握し、支えたり気付かせたりしていくことで、みんなが友達との関わりを十分に楽しめるようにします。
・子ども達が話し合いで何かを決める場合には、みんなの意見が反映され、参加している子がみんな納得した上で遊びが進められ、力関係で遊びが展開されることがないように見守っていくことが大切です。
・子ども達が考える中で困った時には、保育者は出すぎることなく、ヒント程度のアイデアを伝え、子どもに刺激を与えることで子ども達が主体になって考えたり楽しんだりしていけるようにします。

Ⅲものとかかわることを楽しむ子

砂・土・水いじりからそれらを使って表現する遊びへ

事例1【身近なものいじり】0歳の頃（4～6か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
動くものを目で追おうとしたり、音の出るものに反応するようになります。
（それは）
・目に入るいろいろなものに興味をもつようになるからです。

ここでは

身近にある興味をもったものをじっと見つめ、その方向に関わろうとする姿が見られました。

保育のポイント

・目で追いやすいような玩具を準備したり、興味をもつような音の出る玩具を準備しておくようにします。

事例2【身近なものいじり】0歳の頃（6～10か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
自分から身近なものに関わろうとするようになり、何でも口に運んでなめるようになります。
（それは）
・手の届く身近なものに興味をもち、それが何かを確かめる手段として口を活用するようになるからです。

ここでは

身近なものに興味をもって関わり、それが何かを知ろうとして手でいじくったり、口に入れて確かめようとする姿が見られました。

保育のポイント

・感触のよい素材を準備しておきます。
・子どもの口に入ったものは、毎日洗って衛生面を保つようにします。
・誤飲につながるような危険なものは置かないようにします。

事例3【身近なものいじり】0歳児の頃（10～12か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
型落としなど、手先を使う遊びに興味をもち、型に入れられると嬉しそうな表情をするようになります。
（それは）
・手でものを握ったり、指でものをつまんだりするなど、ものとじっくりと関わることができるようになるからです。

ここでは

興味をもったものが何であるかを漠然と認識したうえで、繰り返しそれと関わって楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・安全な環境の中で、手、指、手首、腕、足の運動など個々の発達に合った身体運動を十分に楽しめる空間を整えます。
・集中して遊ぶ姿を見守りつつ、遊びの幅が広がるよう動きの見本を示したり、玩具を促したりします。
・保育者は、子どもの行動を言語化していくようにします。

事例4【水いじり】0歳の頃（10～12か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
水に対する恐怖心は少なく、水を手でパシャパシャたたいたり、流れ落ちる水を目で追うようになります。
（それは）
・お座りの姿勢も安定し、手指の操作も器用になり、安定した姿勢や異なる操作の仕方でものとの関わりが楽しめるようになるからです。また、手応えがあり、五感に直接的に訴えかけ、形の変化にも富んでいる水の面白さに気付くようになるからです。

ここでは

しっかりと座って水面を手で叩いて反応を楽しんだり、流れ落ちる水を目で追って楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・一人一人の空間（個別のたらいなど）を確保して、自分のペースでじっくりと水に親しむ時間を保障するようにします。
・安全や衛生面に注意します。

事例5【水いじり】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
ホースやじょうろから出る水に手や頭など、体を向けるようになります。また、目的はなく、用途も違うが、玩具をもちたがるようになります。
（それは）
・興味をもったものに対して体の向きや場所を変化させたり、別のものを道具的に使用したりしながら、単一ではなく複数の方法でものと関わることができるようになるからです。また、容器から簡単に出たり入ったりできる水の面白さを楽しめるようになるからです。

ここでは

思い思いに気に入った容器を持って、水を入れたり出したりすることを楽しんだり、ホースやじょうろから流れる水に手で触れたり掬ったりして楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・子どもの動きに合わせて繰り返し容器に水を入れたり、ホースから水を流したりして、興味をもった遊びを十分に楽しむことができるように環境を整えるようにします。
・また、どの子も遊びを楽しむことができるように玩具を子どもの人数分準備するようにします。

事例6【砂・土いじり】1歳児（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
手全体を使って砂を掴んだり、放したりして遊ぶようになります。また、スコップなどの玩具に興味をもって遊ぶようになります。
（それは）
・以前のように手に入れたものを何でも口に入れる姿がなくなるため、砂や土でも手で触れて楽しむことができるようになるからです。また、砂・土は水と同様に手応えがあり、五感に直接的に訴えかけるものがあるうえに、水とは異なり変化したまま形を保つことができるため、そうした面白さに気付くようになるからです。

ここでは

お皿に砂や土を詰めたり、保育者の手を借りながらひっくり返して、形を楽しむ姿が見られました。また、できあがった形を次々と壊しては喜び、笑い合う姿が見られました。

保育のポイント

・保育者がして見せたり、子どもがしていることに合わせて、「ジャー」「グシャ」などの分かりやすい言葉をつけることで、真似をしてみよう、もう1回やってみようという気持ちがもてるようにします。
・さらさらの砂や湿った砂、ふかふかの砂など、いろいろな感触を楽しめるようにします。
・型抜きで作った砂をつぶして壊す感触や、つぶすことによる保育者の反応を楽しむようになるので、満足するまで繰り返し遊ぶことができるようにします。
・スコップなどの玩具に興味をもつようになり、友達と同じものを使いたいという思いも出てくるので、人数分の同じ玩具を準備しておくようにします。

事例7【砂・土・水の遊び】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
片手にスコップ、もう一方の手に型を持ち、砂を詰めてひっくり返し、型を抜いて遊ぶようになります。
（それは）
・興味を持ったものの性質を探索的に楽しむ段階から、その性質を利用して何かを表現するということが次第にできるようになるからです。また、これまでの経験で培った砂・土・水に関する知識や技能を基にしながら、目的やイメージをもって表現することが少しずつできるようになるからです。

ここでは

バケツや型抜きに砂や土を詰め、保育者の手を借りずに独力でひっくり返し、できあがった形に名前を付けて見立てやつもりを楽しむ姿が見られました。また、砂や土に水を混ぜて固めたり、泥を作って遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・自分で好きな型に砂を詰め、型抜きをしようとする様子をそばで見守り、上手くいかずに困っている時には、さりげなく援助し「できた」という嬉しい気持ちになり、遊びを楽しめるようにします。
・子どものイメージを膨らますことができるように保育者が「おいしそうなプリンね」など、子どもが作ったものを身近なものに見立てて言葉がけをするようにします。

泥遊びから泥団子・色水づくりへ

事例1【泥遊び】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
友達のしていることに興味をもち、漠然とした共通のイメージをもって一緒に遊びながら、自分なりのイメージでいろいろな道具を使って遊ぶようになります。また、手や足にべったりと泥がつく感触や、足の甲に泥をのせてもらい足が埋まる感覚や重みを感じ、何度も繰り返し楽しむようになります。
（それは）
・友達と同じ遊びをしながら自分のイメージに合わせてその性質を利用して表現したり、道具を選んで使うようになるからです。
・また、泥の感触を面白いと感じられるようにもなるからです。

ここでは

スコップで砂を擦り切り、表面を平らにしたものをいくつも作り、料理を再現する姿が見られました。

保育のポイント

・子どもがイメージしたものに合ったものが作れるように様々な形の容器を準備しておくようにします。
・子どものしたいことに合わせて、テーブルを準備するなど、イメージを膨らませて遊ぶことができるような環境を準備するようにします。
・泥の感触を苦手に思う子もいるので、無理に遊びに誘うのではなく、楽しく遊んでいる様子が伝わるようにします。

事例2【泥団子づくり】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
土を練って遊んでいるうちに、土を手の平で握って転がすと団子になることに気付き、遊びに取り入れて楽しむようになります。上手く形にできず壊れてしまうこともありますが、何度も作って楽しみます。
（それは）
・土には決まった遊び方がなく、自在に変化し、偶発的に様々な遊び方に出会い、その面白さを満足するまで楽しむようになるためです。
・指先の感覚が発達し、泥団子を壊さない程度に握る力加減が遊びながら感覚として身に付いてきたためです。
・できることが増える一方、まだまだ完璧にすることができません。しかし、土は壊れてもすぐに再生することのできる可逆的な素材であり、思い通りにできなくても何度でも挑戦することができるからです。

ここでは

型抜きで楽しんでいましたが、湿った土を握ると固まってお団子になりました。しかし、手には土がべったりついてしまい、不思議そうに保育者や友達に見せてくれる姿が見られました。

保育のポイント

・子どもの好奇心を尊重し「やってみよう」という意欲を伸ばすようにします。
・しかし、こんな風に作りたいという思いと、実際に上手くできることにはギャップがあり、イライラしたり、苛立ちから強い口調につながったりすることもあります。そのような時は、保育者が作り始めを少し援助するなどして、自分でできたという経験につなげ、自信がもてるようにします。
・また、子どもがイライラしている時は、保育者はより穏やかに余裕をもって関わるようにし、時にはみんなのいる場所から離れ、1対1でゆったりと関わりをもち、子どもの気持ちを落ち着けるようにします。そして、気持ちが落ち着いたら、保育者と一緒にしたかったことに取り組み、できたという嬉しい気持ちが味わえるようにします。

事例3【泥団子づくり】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
泥団子の感触の心地よさに心を和ませながら、目的の達成に向けて、友達との会話を楽しんだり、気付いたことを伝え合いながらゆったりと遊びこむようになります。
（それは）
・泥団子づくりは、優しい力で同じ動作を繰り返し、思考を巡らせながら遊ぶ必要がないことで、ほっとする時間を過ごせる遊びであるからです。
・なでているうちにつるつるに変化していく感触に心地よさを味わいながら、さらにつるつるにするための追求に楽しさを見いだしていくからです。

ここでは

砂場の砂と水をそのまま混ぜた状態では、なかなかつるつるした表面にはならなりませんでしたが、目の細かいざるを使ってさらさらの砂で泥団子を作ると、以前とは違ったつるつるの感触になり、さらにつるつるにしようと継続して遊び続ける姿が見られました。

保育のポイント

・砂や土の環境を整えておくことで、場所によって砂の感触などに違いがあることに気付き、その特性を活かして遊ぶことができるよにします。
・どうしたらつるつるの泥団子が作れるのか、友達同士で見せ合いながら工夫したところを知らせる機会を取り入れることで、刺激し合って遊ぶことができるようにします。

事例4【色水づくり】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
遊びの中で、偶然出会った色水の発見に好奇心を抱き、身近にある様々な自然物を使ってたくさんの色水を作り、ごっこ遊びに発展させたりして遊ぶようになります。
（それは）
・色水の色に強くこだわりをもつわけではなく、色水を作ることに関心があり、たくさん作ることで満足するからです。
・また、同じような形のものを作ろうとする同型的行動が盛んになり、たくさんの色水が作られますが、その色水自体に強い執着はないので、友達と共有してごっこ遊びも楽しめるからです。

ここでは

それまで砂だけで遊んでいた子ども達ですが、土に水を混ぜると、水に色がついて味噌汁のようなものができることに気付きました。ある子どもが「見て見て」と周りの子にそれを見せると、同じように真似をして味噌汁作りを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達の気付きに保育者も一緒に感動し、周りの子ども達へも気付かせていくようにします。
・保育者も子どものイメージの世界に入り、一緒にやり取りを楽しむことで、そのイメージをさらに膨らませて遊ぶことができるようにします。

事例5【色水づくり】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
「こうしたらどうなるのだろう」「こうするためにはどうしたらいいのだろう」と思考を巡らせ、試しながら遊びを楽しむようになります。
（それは）
・これまでの経験で培った知識や技能を基に、原因を想像したり、組み合わせた結果を予測しながら実際に試したり試行錯誤することの楽しさを感じるようになるからです。

ここでは

朝顔の花を水の中でつぶし、混ぜていくと水の色が変わることを発見し、花びらを集め、少しずつ水を加えて調整し、いろいろな変化を自分なりに試してみる姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達がいろいろな自然物を使って試しながら遊べるように、見通しをもって園庭の環境を整えます。
・色の変化に関心を示している子ども達の様子に合わせて、適当な大きさの透明な容器を準備し、より色の変化がわかりやすいようにします。

砂・土・水の不思議探究から協同的な砂場遊びへ

事例1【砂・土・水の不思議探究】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
遊びの中で、不思議に思うことに出会うと「どうしてなんだろう」と関心を寄せ、自分なりに試そうとするようになります。
（それは）
・知的好奇心も旺盛になり「どうして？」と不思議さを感じたことに興味深く関わり、自分なりに納得するまで試し、理由を見いだそうとするようになるからです。

ここでは

絵具と筆で絵を描いている5歳児の姿を見て、4歳児も同じように筆に水を付け、乾いたコンクリート廊下をなでてみました。すると、しばらくたつと水は乾いて消えてしまうことを発見しました。「描いたのに消えてしまう」ことに関心をもち、描いては消えていく様子を眺めている姿が見られました。

保育のポイント

・子どもが自らが気付き発見したことを認め、共感していくようにします。
・豊かな感性が表現できるように子どもに寄り添った言葉がけをします。
・保育者がすぐに関わりをもつばかりではなく、子どもが1人でじっくり考え、試すことができる時間も大切にします。
・遊びながら気付いたことを保育者がみんなに伝える機会をつくることで、1人の気付きをみんなの気付きへ広げ、他の子も興味が向けられるようにします。

事例2【砂・土・水の不思議探究】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
遊びながら「どうしてだろう」という不思議さを感じると、その不思議さを友達と共有して追求して遊ぶようになります。
（それは）
・「どうしてだろう」という不思議さを友達と共有し合うことができるようになり、友達と協力してその理由を探究することに楽しさを見いだして遊ぶようになるからです。

ここでは

水を勢いよく注ぐと水が樋の周りの土を押し流してしまう。そっと流し入れると、水はすぐに土の中に吸い込まれてしまうということに気付き、友達と協力して、1人が樋を支えながら周りの土を固め、もう1人が水を流し入れ、斜めに立てた樋から水を流す姿が見られました。

保育のポイント

・子どもの不思議さに保育者も寄り添い、子ども達が遊びながらその不思議さを追求し、自分なりに考え出した理由や原因を十分に認めるようにします。その子ども達が考えたことがたとえ違ったとしても、保育者はその場で否定するのではなく、子ども達なりに原因を見いだそうとする行動を認めるようにします。
・そして、子ども達が不思議さの追求から見いだしたことを、みんなの前で伝える場を設けます。そうすることで、理由を見いだすことのできた自分、また、みんなに認められた自分というものの存在意義を感じられるようにします。

事例3【砂場での山を作る遊び】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
気の合う友達や同じことをしている友達と、何となく一緒に山を作ったり、大きな穴を掘ったりして同じ場を共有して遊ぶようになり、次第に同じ目的の下に遊ぶようになります。
（それは）
・特定の友達であれば、作ったものを共有することができるようになり、会話を交えて遊びを進めるうちに、互いのイメージが共有されていくからです。

ここでは

1人の子が山を作り始めると、同じことに興味をもった友達が集まり、一緒に力を合わせて山を作り始めました。山ができあがるとそれぞれの方向からトンネルを掘り、3人の手がトンネルの中でつながると嬉しくてたまらない様子が見られました。

保育のポイント

・保育者も一緒に遊びながら、子ども達のやりたいことが満たされていくようにします。
・子ども達一人一人が十分にやりたいことができ、満足することができるようにすることで、子どもたちが視野を広げ、友達の思いに気付き、受け入れていけるようにします。
・1人では難しいことでも、友達と一緒にすることで「できた」ということを保育者が言葉でさり気なく示していくことで、協同することのよさに気付けるようにします。

事例4【砂場での山を作る遊び】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
気の合う友達と共通の目的をもち、作業を分担するだけでなく、場所の分担も行い、協力し合って効率よく遊ぶようになります。また、自分のしようとする遊びに見通しをもち、目的に応じて道具を選択し、準備してから遊び始めるようになります。
（それは）
・友達と意思疎通をしながら目的をもって遊ぶようになるとともに、目的に応じた道具がわかり、見通しをもって遊びを進めるようになるからです。
・また、どの様な方法が効率よく遊びを進められるかという見通しももてるようになります。

ここでは

友達と一緒に土を集めて作った山を掘っていくとトンネルができることを知り、向こう側とつながりたいと言い出し、お互いに掘り始める姿が見られました。

保育のポイント

・砂の特性を理解しながら、共通の目的を達成するためにそれぞれが砂と上手く関わり、気持ちを合わせて遊びを進めていく様子を保育者は温かく見守るようにします。
・みんなで協力して作りあげる様子を保育者もそばで見守りながら、それぞれの子どもの様子を言葉にして伝え、より一緒に進めているという気持ちが感じられるようにします。

事例5【砂場での水を流す遊び】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
水や砂の感触を楽しむだけでなく、水を流すことに興味をもつようになり、いろいろなものを流してみることを楽しむようになります。
（それは）
・いろいろな道具に関わって遊ぶ中で出会った新たな発見に関心を抱き、積極的に関わろうとするようになるからです。

ここでは

横に置いた樋に、じょうろで水を流し、流れていく様子を友達と何度も繰り返し見て喜んでいる姿が見られました。

保育のポイント

・保育者は子どものその時折の楽しみ方に寄り添い、保育者が遊びを導くのではなく、一緒に考えたり、ヒントとなるような言葉がけをすることで、子ども達同士で遊びを進める楽しさを味わえるようにします。
・「こうやりたい」「もっとこうしたい」と願望や理想をもつようになるものの「やりたいけどうまくいかない」という現実とのギャップがおこるため、興味関心をそれほど持続することができません。そのような経験もしながら、それでもあきらめずに試したり、やり直したりできたときの経過を認めることで、子どもの意欲を高めていくようにします。

事例6【砂場での水を流す遊び】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
友達とイメージを共有し、共通の目的にもち、その目的の達成に向けて、物の性質を利用したり、適した道具を選びながら協力して遊ぶようになります。
（それは）
・「こうしたい」という目的意識を強くもつようになり、これまでの経験の中で気付いたことを取り入れながら、目的の達成に向けて粘り強く友達と協力して取り組むようになるからです。
・また、目的が達成すると、そのことよりも難しいさらなる目的を考え、遊ぶことに楽しさを感じるようになるからです。

ここでは

山砂の砂場に穴を掘り「温泉」ができた。「温泉はお湯がジャージャー出ている」という子の声で、水道から温泉まで水を流す道づくりが始まりました。樋の形や大きさ、砂や土の性質に気付きながら、友達と協力してなんとか道づくりをしようとする姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達の主体性を大切にし、目的に向けて友達と協力しながらじっくりと探究を楽しめるような、時間や空間を含めた環境の工夫をします。
・遊びの中での子ども達の発見や疑問を柔軟に捉え、保育者も一緒になって驚いたり不思議さを感じることで、子ども達の好奇心をより高めて遊びが展開されるようにします。

Ⅳ　探究することを楽しむ子

身近なものに対する探索行動から共感的なまねっこ遊びへ

事例1【探索行動】0歳の頃（8～12か月）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
ずり這いや四つ這いなど、できる移動手段で動き回り、見つけたものを見たり、手に持ったり、口に入れたりして盛んに遊ぶようになります。
（それは）
・いろいろな姿勢や動きをとれるようになり、見える範囲も次第に広がっていき、様々なものに興味を示すようになるからです。

ここでは

身近なものに興味をもって関わり、目で追ったり手で触ったり口に入れたりしながら、それが何かを確かめようとする姿が見られました。

保育のポイント

・子どもの成長発達に合った玩具を準備し、自分で取れる場所に配置するようにします。
・玩具の破損などに気を付け、点検やこまめな消毒をするようにします。

事例2【探索行動】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
興味のあるものを見つけて向かっていき、手に触れたり指さしをしたりするようになります。また、見えたものを指さし、喃語を発しながら保育者にアピールするようになります。
（それは）
・歩行ができるようになることで、行動範囲が広がり、興味を向けたものに自分から向かい関わるようになるからです。
・また、これまでイヤイヤなどの身振りや笑う、泣くということが保育者に自分の思いを知らせる手段であったのが、指さしや喃語を発するなど違う手段を使うことができるようになるからです。

ここでは

壁に貼ってある犬のポスターを指さし、「アッアッ」とそれに向けて喃語を発したりしながら、保育者にそれを伝えようとする姿が見られました。

保育のポイント

・子どもが興味をもったことに対し、思いを受け止め、共感していくようにします。
・歩き始めは、上りよりも下りの方が転倒しやすいため、そばで見守るようにします。
・子どもの発信から思いを推察し、1つ1つ丁寧に分かりやすい言葉で返していくことで、自分の気持ちが伝わる喜びやそのものが何かということを理解することにつながっていくようにします。
・思いもよらないところに興味をもって探索するようになるので、誤食には十分に気を付けます。

事例3【探索行動】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
探索活動が活発になり、様々なものに興味関心をもち、発見を楽しむようになります。また、保育者に見つけた喜びを伝えようとするようになります。
（それは）
・玩具を拾い上げたり、歩きながら方向転換ができるなど、複雑な動作ができるようになることで、より自分から様々なものに関われるようになるからです。

ここでは

地面に落ちている落ち葉に興味を示し、「パッパ」と言いながら、積極的に関わり、探索する姿が見られました。

保育のポイント

・散歩や戸外遊びでは、危険のないよう見守ることで探索活動を十分に楽しめるようにします。
・子どもの発見に対し、嬉しい気持ちに共感し、受け止めていくようにするとともに、子どもの質問には丁寧に応えることで、会話からものの名前など知ることができるようにします。

事例4【まねっこ】1歳の頃（前半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
身近にいる人の簡単な動きを見て、その動きを自分なりに真似て再現するようになります。**（それは）**
・手足の簡単な動きができるようになり、安心し信頼できる関係の中で、保育者が行うことに憧れや興味を示し、その動きを真似てみようと思うようになるからです。

ここでは

保育者がサッカーゴールのネット越しに、子ども達に「タッチ！」と両手を出すと、保育者の動きを真似て子ども達も同じように両手を出し、保育者とタッチすることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・保育者が楽しそうに簡単な動きを見せたり、子どもと同じ姿勢や動きをすることで、真似してみたいという思いがもてるようにします。
・子どもの動きに合わせて保育者が表情豊かに反応することで、保育者と関わりたい子どもの気持ちを満たすようにします。
・子どもの動きを保育者がその都度言葉に置き換え意味づけしていくことで、自分の行動の理解につながるようにします。

事例5【まねっこ】1歳の頃（後半）

子どもの姿

（この時期に子どもは）
身近にいる人の動きをよく見て自発的に真似をしたり、保育者に促されて真似をしたり、友達が真似をして楽しんでいる様子を見て同じように真似をして楽しむようになります。また、うまく真似したことを保育者に認められると喜ぶようになります。
（それは）
・保育者や友達の動きを見て、自分なりに動きを真似することができるようになるからです。
・また、愛情や嫉妬などの感情が芽生え始め、真似した動きを示すことで、大好きな保育者の関心を惹きつけようとするようになるからです。

ここでは

保育者が「ねこ」「うさぎ」「ライオン、がおー！」と、子ども達に簡単な動作をしたり表情を変化させて見せると、自分も同じようにやってみようと真似をする姿が見られました。

保育のポイント

・子どもがやりたいと思うようなことを保育者が見立て、つもりになって遊ぶことで楽しさが増していくようにします。
・より同じイメージがもてるように保育者がわかりやすい言葉がけをしたりして関わりをもつようにします。
・保育者は、一人一人の自分を認めてほしいという思いを受け止めながら関わりをもつようにします。

ままごと遊びからお店屋さんごっこへ

事例1【ままごと遊び】2歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
家庭や保育所など、身近な場面で体験したことを自分なりに真似てままごと遊びをするようになります。
（それは）
・模倣をする力がつき、生活の中での様々なものに気が付き、興味をもち、見立て遊びができるようになるからです。

ここでは

2人ともお母さんになったつもりで、人形を赤ちゃんに見立て、服を着せたり、おむつを替えたりとお世話をしてごっこを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・日常生活を再現して遊べるような玩具を準備します。
・保育者が役になりきって一緒に遊びながらやり取りを楽しむことで、より生活場面の再現を楽しめるようにします。

事例2【ままごと遊び】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
保育者や友達と一緒にごっこ遊びを楽しんだり、「私はお母さん」「私はお姉ちゃんだよ」と身近な人の模倣をするようになります。
（それは）
・人との関わりが増え、友達と一緒に遊ぶことを楽しいと感じたり、身近な人に興味関心をもち、「お母さんのつもり」など、つもり遊びができるようになるからです。

ここでは

それぞれ、お母さん、お姉さんになったつもりで、おはじきをご飯と見立ててお椀に入れ、黄色い俵の玩具を卵焼きに見立ててお皿にのせ、料理を作り、食べることを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・遊具の数を多めに準備したり、具体物だけでなく、チェーリングや俵を使って、十分に見立て遊びができるようにします。
・なりきって遊んでいる子どもに合わせて、保育者も関わりをもち自分のイメージに合わせたなりきり遊びを十分に楽しめるようにします。

事例3【お店屋さんごっこ】3歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
身近な生活の中で見たり、経験したことを真似て遊ぶようになります。
（それは）
・生活の中での様々な出来事をよく観察し、記憶しておくことができるようになり、言葉や行動で表現できるようになるからです。

ここでは

お団子を、ままごとコーナーのコンロの上に並べた子達が「お団子屋さんでーす」言うと、近くにいた子が「お団子2つください」と買いに来て、「はいどうぞ」「ありがとう」とお店屋さんのやり取りを楽しむ姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達がお店屋さんのイメージをしやすいように保育者が作ったものや遊具、衣装などを準備しておくようにします。
・遊びに必要なものを自分なりに作ったり、何かを見立てることで取り入れて遊び始めた時は、たとえそのものが空き箱であっても、発想自体を認め、取り入れて楽しく遊べるようにします。
・保育者も役になりきって一緒に遊び、やり取りをすることでイメージが膨らむようにします。
・子ども達が再現を楽しめそうな環境を準備しておくことで、遊び始めるきっかけ作りをしたり、そこからイメージを膨らませることができるようにします。

事例4【お店屋さんごっこ】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
自分の体験からお店屋さんのイメージを膨らませ、自分なりにそのものに見立て製作したものを使って、実生活で体験したことを再現して楽しむようになります。
（それは）
・自分が実生活で経験した言葉のやり取りや、お店の様子を記憶することができるようになり、その記憶をもとに再現することができるようになるからです。
・また、遊びに必要なものがわかり、自分なりに作ることができ、作ったものを友達と共同で使って遊ぶことができるようになるからです。

ここでは

マクドナルドという共通のイメージをもちながら、お客さんからお金を受け取りレジを打ちたい子、空き箱で商品を作りたい子、商品をお客さんに渡したい子など、それぞれの楽しみ方で遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・子どもの遊びの状況に応じて、共通の帽子や身に付けるものを保育者が準備することで、より子ども達の遊びに対する関心を高められるようにします。
・必要なものを自分なりに作ることができるようになるものの、自分のイメージするものを表現できずに困っていることもあります。保育者は、子どものしようとしている遊びの内容をつかみ、ヒントとなりそうな絵本やチラシ、材料を目に止まるところに置くなど、環境を配慮することで、イメージを実現していけるようにします。
・保育者がさりげなく友達との関係をつないだり、調整したりしていくことで、友達とイメージを共有して遊ぶ楽しさを味わえるようにします。

事例5【お店屋さんごっこ】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
遊びたいお店屋さんのイメージを友達と共有し、共通の目的に向けて役割を分担して協同しながら遊ぶようになります。商品もより本物らしく工夫して作り、お店屋さんらしく環境を整えて遊ぶようになります。
（それは）
・実生活での経験をより詳細に記憶に残せるようになり、イメージがより現実的になっていくからです。また、友達と一緒に記憶を基にしたイメージを出し合うことで、より現実的な表現につながり、いかにそのイメージに近づけていくかを考え合って遊びを進めていくようになるからです。

ここでは

より本物のスイーツのようにしたいと、生クリームやフルーツのトッピングにもこだわりながら、たくさんのスイーツを作り、「スイーツ屋さんをしよう」と共通の目的もできあがっていきました。スイーツをさらに作る子、お客さんにスイーツを売る子と役割分担をしながら進めていく姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達の考えをよく聞き、保育者もその考えに共感していくことで、さらに意欲を高めて遊びを創り出すことを楽しめるようにします。
・商品を作ること、お客さんとのやり取りをすること、必要な環境を整えることなど、一連のお店屋さんに関するストーリーを整えてより本物らしさを追求しながら遊ぼうとします。保育者は、そのような子ども達の遊びの様子を見守りながら、子ども達が自ら素材や材料を選んで準備を進められるような環境を整え、自分達のしたいお店屋さんを展開していけるようにします。

ごっこ遊びからストーリー性のある劇遊びへ

事例1【単独のごっこ遊び】3歳児

子どもの姿

（この時期の子どもは）
作ったものを見立てることによって、自分の中で想像を膨らませ、想像の世界の中で表現を楽しむようになります。
（それは）
・自分で想像の世界を作り出すことができるようになるからです。

ここでは

積み木をつなげて作ったところを家に見立てて、そこに積み木の人形を持ち込み、その家に住んでいる人として、家の中を移動させたり、人形同士で対話をさせて遊ぶ姿が見られました。

保育のポイント

・自分の見立てたものを使って、自分の想像の世界に入り込み、満足して遊べるように、なりきっている様子を温かく見守り、その想像の世界で保育者も関わりをもつようにします。
・自由に見立てられるようなもの（積み木、ブロック、砂など構造的なもの）を少し形作るなどして準備しておくことで、イメージを広げて遊べるようにします。

事例2【協同でのごっこ遊び】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
気の合う友達と自分以外の人物や動物になりきり、想像の世界を共有しながら一緒に遊ぶことを楽しむようになります。
（それは）
・想像したことや考えたことを現実と区別して理解できるようになり、過去、現在、未来の言葉を理解して使い分けながら友達とイメージを伝え合うことができるようになるからです。また、想像を膨らませて遊びを作り出して楽しむことができるようになるからです。
・現実や物語の世界の人物や動物から想像を膨らませ、イメージを友達と伝え合い、共有することができるようになるからです。

ここでは

犬や猫などの大好きな動物を空き箱などで作り、作ったものを現実のもののように扱い、散歩したり会話したりする姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達は、自分なりにそのものになりきって遊ぶ中で、友達と同じものをもったり、同じ動きを楽しみながら友達と一緒に遊ぶということに楽しさや嬉しさを見いだしています。その子ども達の思いを保育者が言葉にして表していくことで、一層友達を意識して一緒に遊ぶことを楽める雰囲気を作っていくようにします。
・子ども達自らが思いついた「～しよう」「～作ろう」という思いを大切にし、保育者もどうなるのか、どのようなものができるのか楽しみにしているという思いを伝えて見守り、子ども達の意欲を掻き立てるようにします。
・自分はこうしたいという思いをもって遊ぶようになりますが、友達に受け入れられないこともあります。そのような時には、状況により、受け入れられない悲しい気持ちに寄り添ったり、悲しい気持ちを周りの子に伝え、どうするかを子ども達と一緒に保育者も考えていくようにします。

事例3【協同でのごっこ遊び】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
友達とイメージを共有し、子ども同士で想像の世界のストーリーを創造しながら遊びを作り上げることを楽しむようになります。
（それは）
・イメージを出し合い共通理解をしながら、ストーリーを創造するようになることで、みんなが納得した遊びとなり、みんなで楽しさを共有して遊ぶようになるからです。
・自分の思いや考えだけが優先されるのではなく、多角的に物事を捉え、いいと思ったことを互いに認め合うことができることで、それぞれが自分の持ち味を発揮でき、充実した遊びを創造できるようになるからです。

ここでは

数日前から始まったショーごっこのプログラムを考え、ワクワクしながらも真剣な表情で打ち合わせをし、衣装を着てなりきってお客さんにショーを見せる姿が見られました。

保育のポイント

・自分達の創り出したもの、考えたことを、他の子や保育者に見てもらいたいという思いをもつようになり、見せることを意識したストーリを構成したり、環境を整えて遊ぶようになるので、保育者は見る側になり、主体的に遊びを進めようとする子どもの様子を温かく見守っていくようにします。
・それぞれの思いや考えを伝え合う話し合いの機会を大切にして、解決を急ぐのではなく、解決に向けてじっくりとみんなで向き合って考えられるようにし、子ども達自身の力で遊びを進めていることが実感できるようにします。

事例4【協同での劇遊び・劇づくり】4歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
それぞれに自分のなりたい役を選択し、物語の大まかなイメージを共有して、気の合う友達と役になりきって、一緒に物語の世界を楽しむようになります。
（それは）
・ストーリーを友達と共通理解して遊ぶようになり、ストーリーの展開を理解して遊びを進めることができるようになるとともに、物語に出てくる役を理解できることで、そのものになりきることを楽しめるようになるからです。
・また、物語の大まかなイメージを基に遊んでおり、楽しいと思う部分だけを繰り返し演じることも受け入れられる曖昧さがあることでどの子も楽しめる遊びとなるからです。

ここでは

ラプンツェルになりきって遊んでいる友達に興味をもった子が、「髪の毛にお花の飾りもしたいな！」とアイデアを出すと、みんなも「いいね！」と言い、「一緒に変身することになりました。一人一人が役になりきることと、友達と一緒のことをする楽しさを感じている姿が見られました。

保育のポイント

・自分の思いや考えを表すことはできるようになるものの、保育者の後押しが必要であったり、自分の思いを強く出す子もあります。保育者は子ども達の遊ぶ様子を見守りながら、強く思いを出す子の思いだけで遊びが進まないようにしていくことが必要です。
・それぞれが役になりきって遊んでいるので、保育者もその子ども達の楽しんでいる物語の世界に合わせた関わりをもち、それぞれが十分に自分なりの表現を楽しめるようにします。

事例5【協同での劇遊び・劇づくり】5歳児

子どもの姿

（この時期に子どもは）
子ども達同士で自分達がしたい劇遊びをするために必要なことやものを考えて準備を進め、自分達の力で物語を創造し演じることを楽しむようになります。
（それは）
・自分の役だけに関心を向けるのではなく、物語全体に関心を向けて友達と思いを伝え合い、協力し合って、遊びを進めようとするようになるからです。
・また、それぞれの得意なことやこれまで経験から得た知識を上手く取り入れながら、友達と一緒に考えアイデアを出し合い創意工夫を重ねて遊ぶようになるからです。

ここでは

それぞれ自分のカメを作り、みんなでストーリーを考えて、カメの劇ごっこで遊び始める姿が見られました。

保育のポイント

・子ども達の思いに合わせて、道具や材料を選び必要なものを作ることができるようにしたり、場所を確保してじっくり遊びこめる環境を整えるようにします。
・みんなで考え合っても、アイデアが浮かばず、遊びが停滞してしまった時には、保育者からヒントとなるような言葉がけをしたり、様子を見てアイデアを提案することも時には必要です。そのことをきっかけに自分達のアイデアを加えて遊びに取り入れ、自分達で遊びを進めているということを実感しながら遊びを作り上げていく楽しさや、作り上げた達成感を感じられるようにします。